sutta, vol. I, pp. 160–175)、『中阿含経』第五六巻（二〇四）羅摩経（大正蔵、一巻、七七五ページ―七七八ページ）に述べられている。［その内容は本書で以下において適宜紹介検討する。］

(10) 『中阿含経』第五六巻（二〇四）羅摩経（大正蔵、一巻、七七六ページ上―中）。なお同様の反省は *MN.* No. 14 Cūladukkhakkhandha-sutta (vol. I, p. 91)、『中阿含経』第二五巻（一〇〇）「苦陰経」（大正蔵、一巻、五八六ページ中以下）。

(11) *DN.* vol. II, p. 21 f.

(12) *Buddhacarita* II, 26 f. 南方仏典のうちでこのようなことに言及しているものとしては *Vimānavatthu* 81 がもっともっとも古い（H. Oldenberg, *Buddha, Sein Leben, Seine Lehre, Seine Gemeinde*, 13. Auflage. Herausgegeben von Helmuth von Glasenapp, Stuttgart, Cotta Verlag, 1959, S. 114）。

(13) 『修行本起経』下巻、遊観品など。

(14) ［四門出遊（四門遊観ともいう）に関する伝説］*DN.* vol. II, p. 23 ; *Jātaka*, vol. I, p. 58, *l.* 31 ; *Saṅghabhedavastu*, Part I, pp. 65–75 ; *Buddhacarita* III, 26–65. 『五分律』第一五巻、第三分初受戒法上（大正蔵、二二巻、一〇一ページ中―一〇二ページ上）、『有部律破僧事』第三巻（大正蔵、二四巻、一一二ページ下―一一四ページ上）、『修行本起経』下巻、遊観品第四（大正蔵、三巻、四六六ページ中―四六七ページ下）、『瑞応本起経』上巻（大正蔵、三巻、四七四ページ中―四七五ページ上）、『過去現在因果経』第二巻（大正蔵、三巻、六二九ページ下―六三〇ページ中）、『仏本行集経』第一四巻、出逢老人品第十六（大正蔵、三巻、七一九ページ下―七二〇ページ下）、『方広大荘厳経』第五巻、感夢品第十四（大正蔵、三巻、五七〇ページ上―下）、『普曜経』第三巻、四出観品第十一（大正蔵、三巻、五〇二ページ下―五〇三ページ下）、『仏所行讃』第一巻、厭患品第三（大正蔵、四巻、五ページ下―六ページ下）。

(15) サーンチー〈*ZIM.* (2), pl. 9〉、六世紀・アジャンター〈*WOB.* pl. 44〉、「老人を見る」八世紀・ボロブドゥール〈*WOB.* pl. II-46〉〈『甦る』p. 94〉、「病人を見る」八世紀・ボロブドゥール〈*WOB.* pl. II-47〉〈『甦る』p. 95〉、「死者を見る」八世紀・ボロブドゥール〈*WOB.* pl. II-48〉〈『甦る』p. 95〉、「修行者を見る」八世紀・ボロブドゥール〈*WOB.* pl. II-48〉〈『甦る』p. 96〉、「太子出遊の図（霊鷲）」〈『史』I』p. 9〉、「新婚の二人が人生の生老病死を観ずる」ペシャーワル出土〈*Sehrai Peshawar.* pl. 21〉。

(16) 〈*Sehrai Peshawar.* No. 21〉。

(17) *Saṅghabhedavastu*, Part I, pp. 75–76. 『有部律破僧事』第三巻（大正蔵、二四巻、一一四ページ上）。仏教美術においても、しばしばテーマとされている。二世紀後半・サーリ・バーロル出土・ペシャーワル博物館蔵〈『仏像の起源』pl. 41〉、三～四世紀・ガンダーラ・ペシャーワル博物館蔵〈*WOB.* pl. 33〉〈*Sehrai Peshawar.* No. 20〉、一一世紀・ミャンマー・パガンの Ananda 寺〈*WOB.* pl. 34, 35〉〈『敦煌道』p. 96〉〈『ブッダの世界』p. 472〉、「樹下観耕（ボロブドゥール）」〈『甦る』p. 86〉。

二　結婚

ゴータマの結婚したことは事実であったにちがいない。それはすべての仏伝の伝えるところであり、またその妃が男子ラーフラ（Rāhula）を生んだことも、すべての仏伝の伝えるところである。ただ、今日のわれわれが考えると、伝記のひとつのクライマックスとでもいうべき〈結婚〉のことが、古い経典のうちにはほとんど出てこない。パーリ文の「ジャータカ序」のなかでは、宮殿における太子の歓楽の生活の一環として結婚の話が付随的に出てくるだけである。妃を迎えるというのは、少なくとも仏伝作者にとっては、歓楽の生活の一部にすぎなかったのである。

かれが妃を迎えたのは、「ジャータカ序」によると、十六歳のときであったという。［しかし北方に

伝わった説によると、十七歳のときであった。[1]

『やがてボーディサッタは十六歳になられた。王はボーディサッタのために三つの季節に適した三つの宮殿を建てさせた。一つは九階建、一つは七階建、一つは五階建であった。そして、四万人の舞姫をかしずかせた。ボーディサッタは、あたかも天女の群れに囲まれた神のように、飾りたてた舞姫に囲まれ、男性ぬきの音楽を楽しみ、大きな幸せを感じながら、季節の移り変わりにつれて、それぞれの宮殿で過ごされていた。〈ラーフラの母〉は、かれの第一王妃であった。』

(*Jātaka*, vol. 1, p. 58)

九階建ての宮殿とか、四万人の舞姫というのは、空想にもとづく誇張であろう。

妃の名は、南方聖典には伝えられていないといってよいほどであり、北方の聖典には種々さまざまな名で伝えられているが、ヤショーダラー(Yaśodharā)という名が割合に知られている。[2][3] すなわち南方聖典でははるか後世の「ジャータカ序」でも、ただ「ラーフラの母」というだけでその名をあげていない。ただ『ブッダヴァンサ』のなかに妃の名をバッダカッチャー(Bhaddakaccā)としているので、オルデンベルク[4]はそれが正妃の名であったにちがいないという。その名に似ているバッダー・カッチャーナー(Bhaddā Kaccānā)という名は経典[5]にも出ていて、神通に達した人々のうちで第一人者とされているが、註釈によるとヤソーダラー妃の後身であるという。[6] しかしいずれにもせよ、それらはきわめて遅い典籍のなかの記述であるから、はなはだ疑わしい。『ラリタヴィスタラ』[7]では妃の名をゴーパー(Gopā)またはヤショーヴァティー(*Yaśovatī*)と呼び、『マハーヴァストゥ』および『ブッダチャ

リタ』ではヤショーダラー[8]と呼んでいる。若干の漢訳仏典の原文では釈尊の夫人はゴーピー(Gopī)と呼ばれていたらしい。[9] ともかく種々の呼称があるので、もっとも一般的な呼称は「ラーフラの母」(Rāhulamātā)である。[10]

彼女の出生、血縁関係も確定せず、種々の説があるが、ブッダの従妹と考えられていることもある。また彼女は「ジャータカ序」では「第一王妃」と記されているが、第二王妃以下がいたかどうかも不明である。

ヤショーダラーというのは、インドではしばしば聞く名である。その名がはっきり伝えられていないところからみると、おそらく妃は典型的な淑やかなインド貴婦人で、夫に対して従順であったために、表面に現われるほどゴータマの一生に衝撃的な影響は与えなかったのであろう。たとえば妃が悪性の婦人であったとか、姪乱の人であって、それがゴータマの出家の原因となったのであるならば、早くから聖典のうちに個人名がはっきり伝えられていたにちがいない。ちょうどデーヴァダッタのように。ところが彼女の存在はめだたなかったために、聖典作者は彼女の名を忘れてしまった。そうして後代の仏伝作者たちが、彼女のこともなにか書かねばならぬと思ったときに、めいめい妃の名を勝手に捏造したのである。われわれはこの事実のうちに、ひとつのネパール的あるいはインド的な婦人の類型の特徴を見出すことができると思う。

なおもうひとつの可能性ある問題は、釈尊の妃がいくにんもあって、これらはみな別人ではないかということである。後代の伝説によると、シッダールタ太子には三人の妃あり、ヤショーダラーが正

妃で、その他にムリガジャー（Mṛgajā）とゴーピカー（Gopikā）とがいたという。[11] その可能性も否定できないが、ともかく釈尊の子としてはラーフラだけがあげられているから、正妃は一人だけであったのであろうと考えられる。

かれの恋愛物語というようなことは古い経典にはなにも伝えられていない。総じて他の国々にも見られるように、自由な恋愛は放恣なこととして、身分ある人々のあいだでは禁遏されていた社会的事情にもとづくのであろう。ひとつの経典によると、太子の結婚ということは、父なる国王が子のために行なった行為なのである。[12]

ともかく古い経典や戒律書（『四分律』や『五分律』など）のなかで釈尊の伝記に言及している部分においても、かれの〈結婚〉に関してはまったく言及していない。そのわけは、これらの聖典作者の眼からみると、釈尊の結婚は特別の意義をもった出来事ではなかった。世俗の迷いの生活のなかにあったときのひとつの出来事と考えられた。だから無視してさしつかえなかった（これに反して、今日の日本人から見ればさっぱり興味の湧かない三カッサパ兄弟を呪術で帰伏せしめたようなことが、長々と述べられている）。結婚に関する記述があまりにも簡単である。あるいは近代人が考えるような意味での結婚ではなかったのであろう。

しかし〈結婚〉ということは人生の重大事である。これを無視したり軽視したりすることを世人は承知しなかった。そこでおそらく遅れてつくられた諸種の仏伝類においては〈納妃〉ということが大きなテーマとして述べられるようになったのである。妃を迎えたということは、釈尊の生涯のうちで

人間らしい出来事として、後代の仏教徒は、仏伝のなかで大規模にとりあげることになった[13]し、後代の仏教美術でも恰好の題材となった。[14]

とくに後代の諸仏伝においては、シッダッタ太子とデーヴァダッタとが妃を争ったということが詳しく述べられるが、古い典籍のうちには出てこない。釈尊の妃のことは一般に古い仏伝資料にはあまり現われないが、ただ近年においてよく問題にされるのはデーヴァダッタ（提婆）との関係である。とくに日本の映画会社が釈尊を主題として、そのなかで妃がデーヴァダッタに犯されたという筋書で仏教諸国で上映したために、大きな社会的波紋をひきおこしたことがある。このような空想の典拠であるが、釈尊がさとりを得てのち遊歴教化していた留守にデーヴァダッタがカピラヴァストゥにおもむき、ヤショーダラー妃を誘惑しようとしたが、妃に拒絶されてしまったという話がのちに成立し、詳しく伝えられている。[15] しかしデーヴァダッタはゴータマ・ブッダやかれの妃から約一世代若かったのであるから、この伝説は歴史的事実ではないであろう。デーヴァダッタが悪人であるということを印象づけるために、後代の仏教徒が空想して述べた物語なのである。今日のわれわれとしても追究検討したいことがらであるが、いまこの書の目的は、形のととのった仏伝以前の資料にもとづいて釈尊の生涯を叙述したいというのであるから、割愛せざるを得ないであろう。

（1）『太子瑞応本起経』上巻（大正蔵、三巻、四七五ページ上）、『過去現在因果経』第二巻（大正蔵、三巻、六二九ページ中）。

（2）一般に釈尊の夫人の名とされているところの、サンスクリットで Yaśodharā, パーリ語で Yasodharā

とは「誉れをたもつ婦人」「誉れある淑女」という意味である。漢訳では「耶輸陀羅」と音写する。*The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu* (ed. by Raniero Gnoli. Roma, IsMEO. 1977, Part I, p. 82 f.) でも、Yaśodharā という名を記している。

(3) 赤沼智善編『印度仏教固有名詞辞典』(法蔵館、一九六七年) 七八一―七八二ページ。

(4) Oldenberg : *Buddha*, S. 119.

(5) *AN.* vol. I, p. 25.

(6) 赤沼智善編『印度仏教固有名詞辞典』八四ページ。

(7) *Lalitavistara*, ed. by P. L. Vaidya, pp. 100–106. (Ed. by R. Mitra, p. 162 f. ; ed. by Lefmann, p. 142 f.) なお Hermann Beckh : *Buddhismus*, vol. I. S. 82 には『ラリタヴィスタラ』に Yaśovatī という名もあげられているという。

(8) *Buddhacarita* II, 46.『時執仗釈種有一童女。名耶輸陀羅。容色端正世所希有。』(『有部律破僧事』第三巻、大正蔵、二四巻、一一一ページ下)

(9) 「裘夷」(『修行本起経』上巻、大正蔵、三巻、四六五ページ中)、「瞿夷」(Gopī? Gopikā?) (『太子瑞応本起経』上巻、大正蔵、三巻、四七二ページ下―四七三ページ上)、「倶夷」(『普曜経』第三巻、大正蔵、三巻、五〇二ページ上)。わが国にはもっぱらこの伝説が伝えられた。『源氏物語』匂宮に『瞿夷太子の我(が)身に問ひける悟りをも、得てしがな』という文がある。これについて岩波書店『日本古典文学大系』17『源氏物語』四(一九六二年四月)四九七ページには山岸徳平氏が次のように記されている。『瞿夷太子とは釈迦の嫡子で、羅睺羅の事。母は瞿夷である故にかく言った。原中最秘抄にも「羅睺羅ハ是レ瞿夷ノ子ナリ」(原漢文)と見える。瞿夷は、悉達太子(釈迦が太子の時の名)の第一夫人である。十訓抄、第五「安康天皇は」の条には「釈迦如来は、瞿夷夫人に契を結びて、世々菩提心を退せず」などある。……穂久邇・吉田本はじめ、底本以外の青表紙諸本は、すべて「ぜんげう(善巧)太子」とあるが、後陽成・公条本は右傍に「くいイ」としている。善巧太子は未詳であるが、或は薩婆陀羅(*Sabbadra*)、即ち善賢の事であろうか。

……。』ただし右の諸経典では Subhadra はゴーピー夫人の父ということになっている。

(10) G. P. Malalasekera : *Dictionary of Pali Proper Names*, vol. II, London, Luzac and Co., 1960, pp. 741–744 では 'Rāhulamātā' という項のもとに、彼女に関する言及記載を一括して述べている。

(11)『彼時菩薩有三夫人、一名鹿王、二名喬比迦、三名耶輸陀羅。其耶輸陀羅最為上首。其三夫人各有二万婇女。』(『有部律破僧事』第三巻、大正蔵、二四巻、一一四ページ中)。赤沼智善編『印度仏教固有名詞辞典』四二三ページ。

(12)『太子至年十七。王為納妃』(『太子瑞応本起経』上巻、大正蔵、三巻、四七五ページ上)。これは「王なる父がかれのために(dative)妃を納る」と読むべきである。「為」は一字だけでも 'à cause de cela, pour cette raison' と解すべきである(Stanislas Julien : *Syntaxe nouvelle de la langue chinoise*, vol. I, Paris, Librairie de Maisonneuve, 1869, p. 120)。

(13)〔妃の選択に関する伝説〕*Jātaka*, vol. I, p. 58, *l.* 11 ; *Saṅghabhedavastu*, Part I, pp. 62 ; 64 ; 78. (釈尊には多くの妻があったと記す。)『有部律破僧事』第三巻(大正蔵、二四巻、一一一ページ下―一一二ページ下)、『仏本行集経』第一二巻、捕術争婚品第十三上(大正蔵、三巻、七〇七ページ上―七〇八ページ下)、『方広大荘厳経』第四巻、現芸品第十二(大正蔵、三巻、五六一ページ上―中)、『普曜経』第三巻、王為太子求妃品第九(大正蔵、三巻、五〇〇ページ上―下)。なお前註(1)参照。〔結婚に関する伝説〕*Saṅghabhedavastu*, Part I, pp. 62 ; 64 ; 78 ; *Buddhacarita* II, 26–33.『有部律破僧事』第三巻(大正蔵、二四巻、一一一ページ下―一一二ページ下、一一四ページ中)、『仏本行集経』第一三巻、捕術争婚品下(大正蔵、三巻、七一二ページ下)、『方広大荘厳経』第四巻、現芸品第十二(大正蔵、三巻、五六四ページ下―五六五ページ上)、『普曜経』第三巻、試芸品第十(大正蔵、三巻、五〇二ページ上)、『過去現在因果経』第二巻(大正蔵、三巻、六二九ページ中)、『修行本起経』上巻、試芸品第三(大正蔵、三巻、四六三ページ中―下)。

(14)「婚約」ペシャーワル出土〈*Sehrai Peshawar*. pl. 18〉、「同」二〜三世紀・ガンダーラ出土・ラホール博物館蔵〈『田枝』pl. 18, 20〉、「結婚」ヤショーダラー妃を迎えた図」二〜三世紀・ガンダーラ出土・カラ

チ国立博物館蔵〈『田枝』pl. 19〉。またヤソーダラー妃を迎えた結婚式の図、すなわちボサツの結婚を示す図（ガンダーラ）があるが、ボサツと結婚相手が手を結んで、火の上にかざしている。そして火のそばに水瓶が置かれている〈*WOB.* pl. II-40〉。「結婚式」〈*Sehrai Peshawar.* No. 19〉。釈尊の結婚式の情景は、ボロブドゥール（八世紀）にも見られる。バラモンが水を灌頂している〈*WOB.* pl. 41〉。花嫁が宮廷僧にともなわれて太子に会う図がペシャーワル博物館に残っている〈*Sehrai Peshawar.* No. 18〉〈『甦る』pp. 87-88, 91〉。

(15)『有部律破僧事』第一〇巻（大正蔵、二四巻、一四九ページ中―一五〇ページ上）。

三　ラーフラの誕生

ラーフラ（Rāhula）の誕生のことは、文献には示されているが、[1] 美術作品には表現されていない。パーリ文「ジャータカ序」によると、

『そのとき、「〈ラーフラの母〉が男子を出産された」ということを聞いて、スッドーダナ大王が、「息子（ボーディサッタ）にわしの喜びを伝えよ」と使いをやった。』（*Jātaka*, vol. I, p. 60）

父なる王は孫が生まれて、後嗣ぎができたことを喜んだのである。ところがシッダッタ太子はかならずしも喜ばなかったという。

『ボーディサッタはそれを聞いて、「ラーフラが生まれた。束縛が生じた」[2] といわれた。』（*ibid.*）

ゴータマ・ブッダの子ラーフラはゴータマにとって恩愛の絆であり束縛になったと伝えられ、また

それは当然のことであるが、ひとつにはラーフラという名が後世の仏教徒にラーフ（Rāhu）という悪魔を連想させたこともあろう。[3] ラーフは古代インドの神話では、悪鬼の名で、この悪鬼が太陽を呑みこむと日食がおこり、月を呑みこむと月食がおこると考えられていた。[4] 後代の仏教徒は、子がシッダッタ太子の束縛となるという点で、ラーフラという名が悪鬼を連想させて、こういう通俗語源解釈を行なったのである。

ところが父なる王は、そういう連想なしにラーフラという命名を喜んだ。

『王は、「わしの息子はなんといったか」とたずね、そのことばを聞くと、「これからのちは、わしの孫をラーフラ王子という名にしよう」といった。』（*ibid.*）

インドでは、古代から現代にいたるまでつづいている習俗として、新生児の名は祖父がつけるのであるが、ラーフラの場合も、その習俗に従ったのである。

ここでは、父王が孫の誕生を喜んだこと、かれにラーフラと命名したことは確かな歴史的事実である。そうして太子がもの思いにふける性質があったとすると、ラーフとの連想をいだいたということは、あるいは事実であったかもしれない。伝統的な命名式（nāmakaraṇa）の儀式が行なわれたにちがいないが、そのことはなにも伝えられていない。

(1) *Jātaka*, vol. I, p. 60, *l.* 20 ; *Saṅghabhedavastu*, Part II, pp. 30-32.『仏所行讃』第一巻、讃処宮品第二（大正蔵、四巻、五ページ上）。

(2) Rāhulajāto, bandhanaṃ jātaṃ ti.

(3) *Buddhacarita* II, 46.
(4) *Sn.* 465 ; 498.

四　武術の習得

シッダッタ太子が武術を習ったということも、かれの生涯におけるひとつの主要な出来事である。かれはクシャトリヤの生まれであったから、武術の習得は、むしろ義務であった。「ジャータカ序」には、その次第を恐ろしく現実的に述べている。

『こうして、かれは大きな幸せを感じていたが、ある日のこと、親族の集まりのなかでこういう話が出た。

「シッダッタは遊びに夢中になって過ごし、なにひとつ技を学んでいない。戦でもおきたら、どうするつもりなのだろう」と。王はボーディサッタを呼び寄せ、

「いとし子よ、おまえの親族が『シッダッタはなにひとつ技を学ばず、遊びに夢中になって過ごしている』といっているが、ここで、どうしたらよいか考えてみないか」といった。

「父上、わたしには学ばねばならぬ技などありません。都のなかで、わたしの技を見せるために、太鼓の触れを出してください。いまから七日目に、親族のかたがたに技をお見せいたしましょう」

王はそのようにした。ボーディサッタは、電光のように射当てたり、毛髪をも射当てたりする

射手たちを集めさせ、大勢の人々のなかで、他の射手たちとは違った十二とおりの技を親族たちに披露した。このことは「サラバンガ前生物語」に伝えられているところによって知られたい。

そこで、かれの親族一同には心配がなくなった。』(*Jātaka*, vol. 1, p. 58)

弓術を習ったということは確かに歴史的事実であったにちがいない。それは文献[1]にも伝えられているし、また後代の芸術作品[2]にも表現されている。相撲の競技をしたことも、同様に文献[3]にも記され、芸術作品[4]にも浮彫にされている。象を擲ったという、かれの若き日のものすごい武勇譚[5]も伝えられているが、古い経典のうちには伝えられていない。おそらくシャカ族はあまり武備を修めていなかったし、またかれ自身も武術はあまり実修していなかったのであろう。かれに関する武勇譚は後世になってから、かれの偉大性をたたえるために空想されたものであろうと考えられる。

ネパールのグールカ族（Gūrkha Skt. Gorakṣa）は武勇をもって鳴り、ネパール人の誇りとされている。しかしシャカ族は古い伝説に関するかぎり、侵略戦争を行なわず、やがてコーサラ国に滅ぼされてしまうのであるから、武勇を誇っていたとしても、コーサラ国の大軍にはかなわなかったらしい。

(1) 〔弓の競技に関する伝説〕 *Jātaka*, vol. 1, p. 58, *l.* 24 ; *Saṅghabhedavastu*, Part 1, pp. 62-64.『有部律破僧事』第三巻（大正蔵、二四巻、一一二ページ中）、『方広大荘厳経』第四巻、現芸品第十二（大正蔵、三巻、五六四ページ中）、『過去現在因果経』第二巻（大正蔵、三巻、六二八ページ下―六二九ページ上）、『瑞応本起経』上巻（大正蔵、三巻、四七四ページ中）、『仏本行集経』第一三巻、捔術争婚品下（大正蔵、三巻、七一〇ページ中―七一一ページ上）、『普曜経』第三巻、試芸品第十（大正蔵、三巻、五〇一ページ下―五〇二ページ上）。

(2) 「弓術を競う」八世紀・ボロブドゥール〈*WOB.* pl. II-39〉、ペシャーワル出土〈『甦る』p. 91〉〈*Sehrai Peshawar.* No. 16〉〈『敦煌道』p. 97〉、「勝利を博したシッダールタ王子を浄飯王が迎える」ペシャーワル出土〈*Sehrai Peshawar.* No. 17〉。

(3) 〔相撲の競技に関する伝説〕『有部律破僧事』第三巻（大正蔵、二四巻、一一一ページ中）、『仏本行集経』第一三巻、捔術争婚品下（大正蔵、三巻、七一一ページ下―七一二ページ上）、『方広大荘厳経』第四巻、現芸品第十二（大正蔵、三巻、五六四ページ上―中）、『普曜経』第三巻、王為太子求妃品第九（大正蔵、三巻、五〇一ページ下）。

(4) 〈『ブッダの世界』p. 472〉。

(5) 〔象を擲ったことに関する伝説〕 *Saighabhedavastu*, Part I, p. 57.『有部律破僧事』第三巻（大正蔵、二四巻、一一一ページ上―中）、『仏本行集経』第一三巻、捔術争婚品下（大正蔵、三巻、七一二ページ上―中）、『過去現在因果経』第二巻（大正蔵、三巻、六二八ページ中―下）、『瑞応本起経』上巻（大正蔵、三巻、四七四ページ中）、『修行本起経』上巻、試芸品第三（大正蔵、三巻、四六五ページ下）、『方広大荘厳経』第四巻、現芸品第十二（大正蔵、三巻、五六二ページ中―下）、『普曜経』第三巻、王為太子求妃品第九（大正蔵、三巻、五〇一ページ上）。

五　歓楽に飽きる

宮廷で歓楽の生活をほしいままにしたが、ふと一夜めざめて、宮廷の女官らがしどけないすがたで取り乱して寝ているのを見て、女を嫌うようになった、と多くの仏伝には書かれているが、古い聖典のうちにはほとんど記されていない。わずかに『五分律』のなかに簡単に次のように記されている。

『菩薩（＝釈尊）はもろもろの妓女に娯楽せられおわりて、すなわち暫く眠ることを得たりしに、もろもろの妓女らは皆な淳悟として寐れり。菩薩はついで〔目〕覚めて、もろもろの妓直（はべる妓女）を観るに、たがいに荷うて枕となり、或いは形体を露わせること、木人の状のごとく、鼻に涕し、目に涙して、口中より涎を流し、琴瑟箏笛は縦横になりて地に在り。また宮殿を見るに、丘墓のごとくなりき。菩薩は見おわりて、三たび称言すらく、「禍なるかな。禍なるかな」。走りて父王の住むところの宮殿を視るに、宮殿の変われる状もまた復たかくのごとくなりければ、復び「禍なるかな」と称して、深く厭離を生ぜり。』(1)（『五分律』第一五巻）

ただここでもすでにゴータマ・ブッダの超人化・神格化の端緒が見られる。ここで歓楽を楽しんだのはゴータマ・ブッダではなくて、「妓女たち」なのである。原文には「菩薩為諸妓女所娯楽已」となっているから、釈尊はどこまでも受身（passive）の立場にあり、モーションをかけて誘惑したのは妓女たちであるという立て前なのである。

太子が女官たちとの歓楽に嫌気がさしたという次第を、「ジャータカ序」は次のように、あらあらしく、生々しく述べている。

『ボーディサッタは、また大いなる栄光をになって自分の宮殿に登り、〔国王用の〕輝かしき臥床に横たわった。すると、たちまち、飾り物をすっかり身につけ、踊りや歌などに習熟した天女のような美貌の女たちが、さまざまな楽器をたずさえて取り囲み、かれを楽しませようと踊りや歌や演奏をはじめた。ボーディサッタは、その心が煩悩から離れていたので、踊りなどを楽しむ

こともなく、しばしの眠りにつかれた。その女たちも、

「このかたのために、わたしたちは踊りなどをしているのに、このかたは眠ってしまわれた。いまやっても骨折り損よ」と、それぞれ手にしていた楽器を放りだして寝てしまった。油燈がよい香を放ってともっていた。ボーディサッタは目が覚めたので、臥床のうえに両足を組み合わせてすわり、彼女たちが楽器を放りだして眠りこけているのを眺められた。ある者どもはよだれをたらして身体を唾液でぬらし、ある者どもは歯ぎしりをし、ある者どもはいびきをかき、ある者どもは寝言をいい、ある者どもは口を開け、ある者どもは着物もはだけてぞっとするほど秘所を露わにしていた。かれは彼女たちのその変わった姿を見て、ますます欲情がなくなってしまった。かれには、飾り整えられたサッカの宮殿のようなその高楼も、突き刺されたいろいろな死骸が一面に転がっている新しい墓場のように見え、三つの生存の世界がまるで燃えさかる家のように思われた。「ああ、なんという哀れ、ああ、なんという悲惨なことか」と慨嘆のことばが出て、ひたすら出家することに心が傾いていった。』(*Jātaka*, vol. I, p. 61)

後代の伝説ではあるが、この現実的な生々しさは、やはり実際の体験を述べているのであろう。「王宮」と「美女たち」という二つのアトラクションが後世の人々の空想をかきたてたのであろう。後代の仏教文芸[2]においては不可欠のテーマとなったし、また仏教芸術[3]においてはしばしば表現されている。

(1) 大正蔵、二二巻、一〇二ページ上。

(2) 〔宮廷の美女たちの熟睡中の姿態に関する伝説〕 *Jātaka, vol. I, p. 61, l. 13; Saṅghabhedavastu, Part*

I, pp. 81–82 ; *Lalitavistara*, p. 251 ; *Mahāvastu*, vol. II, p. 159 ; *Buddhacarita* V, 44–65. 『有部律破僧事』第四巻(大正蔵、二四巻、一一五ページ上―下)、『修行本起経』下巻、遊観品第四(大正蔵、三巻、四六七ページ中―下)、『瑞応本起経』上巻(大正蔵、三巻、四七四ページ下―四七五ページ下)、『過去現在因果経』第二巻(大正蔵、三巻、六三二ページ上―下)、『仏本行集経』第一六巻、捨宮出家品第二十一上(大正蔵、三巻、七二八ページ下―七二九ページ中)、『方広大荘厳経』第六巻、出家品第十五(大正蔵、三巻、五七三ページ中―五七四ページ上)、『普曜経』第四巻、出家品第十二(大正蔵、三巻、五〇四ページ下―五〇五ページ上)、『仏所行讃』第一巻、離欲品第四(大正蔵、四巻、六ページ下―七ページ中)。

(3) 「宮廷の歓楽」二世紀・ガンダーラ出土・カラチ国立博物館蔵〈『田枝』pl. 21〉、「宮殿における歓楽と出家前夜。眠れる宮廷の女官たち」三世紀前半・ジャムルード出土・カラチ博物館蔵〈『仏像の起源』pl. 30〉、クシャーナ朝・ガンダーラ出土・カラチ博物館蔵〈『源流』pl. 66〉、三世紀・ナーガールジュナコンダ〈*WOB*. pl. 43〉〈*5000 Years*. pl. 119〉、アマラーヴァティー〈*WOB*. pl. 49〉、八世紀・ボロブドゥールのものには三つの宮殿が表現されている〈*WOB*. pl. 42〉〈『田枝』pl. 22 以下〉。

六　家を去る[1]

(一)　決意

新たに妃を迎えた喜びも、ゴータマ・ブッダの憂鬱を消し去ることはできなかった。かれは、王宮における華美で豪奢な生活に満足することができなかった。かれは、人間の生のもつ困難な問題に取りつかれ、思いあぐむようになった[2]。愛児に対する愛情も、かれを永久に世俗の人としてとどめるこ